



TITLE:

志摩磯部村木場の洪積層に就て

AUTHOR(S):

松下, [進]

---

CITATION:

松下, [進]. 志摩磯部村木場の洪積層に就て. 地球 1932, 18(1): 36-38

ISSUE DATE:

1932-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184060>

RIGHT:

nella から區別する事が出来ない。(未完)

## 志摩磯部村木場の洪積層に就て

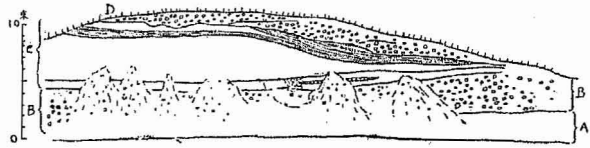
松 下 進

先志摩の海蝕臺地の上部を構成して沿岸棲介化石を含む粘土と礫と砂とから成る地層が存在する。大塚理學士はこれを先志摩層と名づけられた。其の時代は新第三紀といはれ、或は洪積世と考へられて居る。化石は古く佐藤傳藏氏によつて注意されたが、其後あまり採集されたことはないらしく、最近の圖幅説明書にも數個の屬名が擧げられ、保存不完全と記されて居るに過ぎない。

筆者は本年一月志摩青峯山、五知、逢坂峠方面の古期岩層(主として古生層)の調査に従事した序に、中村先生の御指示に従つて磯部村木場に於て前記洪積層の化石を採集した。其の場所は志摩電鐵迫間驛から南方約三三〇米離れて居

る丘麓である。昭和四年同電鐵建設工事に際して砂利を採るために高さ二〇米餘の丘陵の東縁を切り取つたので、圖に示す様に礫層及び粘土層がよく現れて居る。(A)最下部は介化石を含む青灰色粘土であつて、二・五米だけ露出する。化石は脆くなつては居るが、注意すれば良好なものが得られる。又時間をかけて努力すれば後記の種類以外更に多數發見することが出来る。(B)其の上に三米の礫層が乗り、(C)次に粘土層が来る。其の下部〇・四—〇・六米は淡褐黄色、淡黄色、褐色の粘土層で、厚い部分は間に一の尖滅する含粘土礫層を夾む。(C)の中部は青灰色粘土層で、其の厚さは最大四米であるが、膨縮が甚

志摩磯部村木場の切取スケッチ



- A. 青灰色粘土層(介化石を含む)      B. 礫層  
C. 粘土層(中部は青灰色)      D. 礫層

種類が存することが知れた。

1. *Joannisiella lunaris* (Yokoyama), 2. *Joannisiella cumingi* (Hanley), 3. *Cardium (Fulvia) muticum* Reeve, 4. *Dosinia angulosa* (Philips), 5. *Macoma praetexta* (v. Martens), 6. *Raeta yokohamae*

志摩磯部村木場の洪積層に就て

しい。其の中には介化石はなくて樹皮の破片が入つて居る。(C)の上部は黄灰色及び淡褐灰色粘土で、それは不整合に(D)礫層に被覆される。以上の層序は大塚學士が推定された穴川附近の層序によく一致する。唯此處では基底礫層が沖積層に隠れて見えない。

化石は黒田徳米氏の鑑定により、次の

- ensis* (Pilsbry), 7. *Cryptomya busoensis* Yokoyama, 8. *Alodis* (= *Corbula*) *pygmaea* (Yokoyama), 9. *Ba-rnea* (*latissima* var. ?) *japonica* (Yokoyama), 10. *Dentalium sexcostatum* Sowerby, 11. *Solariaella* sp., 12. *Turitella* sp., 13. *Nassarius* (*Hima*) *japonicus* (A. Adams), 14. “*Urosalpinx*” *brillefi* *Lischke*, 15. *Syrnola cinnamomea* (A. Adams), 16. *Actaeopyramis* (?) sp., 17. *Ringicula yokoyamai* Takeyama (MS).

此等の化石は殆ど全部現生種であつて、又其の大部は關東地方の洪積層から産出する。1、3、4、5、6 (?)、13、14は竹山理學士の調べられた紀伊安久川の洪積層から知られて居るもので、9は紀伊南部町界に産する。

斯かる材料だけで志摩の介層の時代を判定することは危険である。然し中村教授や大塚學士が指摘された通り、先志摩の介層は堆積狀態、海面に對する現位置、構造等に於て前記紀州の洪積層に極めてよく類似する。紀伊半島の東側と西側に存して、互に斯くも類似する地層を同時代のものと考へることは甚しく不合理ではあ

るまいと信ずる。中村教授及び黒田氏は南部町

堺の介層を濱名湖畔の洪積層に對比され、大塚氏は先志摩層を南部町堺、安久川の洪積層と共に氏の  $d_{11}$  の中に包含された。

筆者は茲に唯先志摩層の中に良好な化石が産出する(恐らく多數出るべき)ことを報告し、且つ將來介化石によつて他地方の地層と對比される日が来るべきことを豫想するに止める。

摺筆に當り化石鑑定の勞をとられた黒田徳米氏、安久川の介化石に就て指示された竹山俊雄氏に謝意を表する。

## 引用文獻

- (一) 小川琢治(一九〇五)、鳥羽圖幅地質説明書 明治三十八年
- (二) 中村新太郎、黒田徳米(一九二四)、紀伊日高郡南部町堺の洪積統、地球第一卷、大正十三年
- (三) 中村新太郎(一九二五)、三重縣化石產地表、地球第三卷 大正十四年
- (四) 大塚彌之助(一九二八)、志摩磯部附近の自然地理學的地理史の一部の研究、地理學評論第四卷、昭和三年
- (五) 竹山俊雄(一九二九)、紀伊安久川の洪積統、地球第十一卷、昭和四年
- (六) 飯塚保五郎(一九二九)、鳥羽圖幅地質説明書、昭和四年
- (七) 大塚彌之助(一九三一)、第四紀、岩波講座、昭和六年

## 松川扇狀地に於ける地下水と文化景觀 (二)

安 田 初 雄

### 五、地下水溫

#### A 測定方法

東京帝國IV、C100 目盛は一度毎、の水銀棒狀寒暖計を金屬製容器に入れて使用した。初終